

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル: 「「インド世界」の形成: フロンティア地域を視座として」(令和元年度第 1 回研究会)

日時: 令和元年 9 月 26 日 (木曜日) 午後 2 時から 6 時 30 分

場所: 東京外国語大学本郷サテライト 8 階会議室

1. 小倉智史 (AA 研所員) 「趣旨説明」

世界史研究において「南アジア」「インド世界」という歴史世界が措定され、「東南アジア」「中央アジア」「西アジア」などの周辺の歴史世界とは区別される。しかし、この領域が前近代において一つの歴史世界として構想しうるかどうか、特にフロンティア地域におけるある歴史世界への帰属如何の曖昧さについて、近年つとに指摘されてきた。古代から近代までの長期的な視野のもと、個々のフロンティア地域の事例を取り上げて、比較したうえでこの問題について何かしらの解答を出すことを目指す、というのが本共同研究課題の趣旨である。

前近代の「領域内の人々」の中に「インド世界」に相当する地理観があったことは確かである。古くは『マヌ法典』(前 2 世紀—後 2 世紀)に「アーリヤヴァルタ (アーリヤの地)」という南北をヒマラヤ山脈とヴィンディヤ山脈に挟まれた地域を指す用語が登場し、更にグプタ朝時代の 5 世紀頃までにはインド亜大陸南部も包摂する「バーラタヴァルシャ」という用語が定着していた。一方でアラビア語・ペルシア語文献では「ヒンドゥスターン」という用語が長らく用いられていたが、この用語がさす領域は北端・西端についてある程度コンセンサスが見られるものの、東端については曖昧である。また近年の研究で、サンスクリット語・ペルシア語という 2 つの共通語の使用圏に由来する文化世界が構想されており、これは「インド世界」という歴史世界を相対化する。

フロンティア地域を歴史世界の成立から検討する上で、以下のような論点を挙げうる。
A) 歴史世界をまたぐ政体の興亡 (クシャーン朝、エフタル、ヒンドゥシャー朝など)、
B) 歴史世界を越境する人々の動き (商人、スーフィー、集団としてパシュトゥーン人など)、
C) フロンティアにおける地域アイデンティティの形成とより大きな歴史世界への帰属意識、
D) 近現代、特に国境線の画定前後の展開。

(文責: 小倉智史)

2. 宮本亮一 (AA 研共同研究員, 京都大学) 「クシャーンからエフタルへ: 中央アジアから南アジアへの人間集団の移動」

本報告では、1世紀中頃のクシャーン朝から6世紀後半のエフタルまで、中央アジアから南アジアへ展開した諸集団の動向を、近年の学説を整理しつつ概観した。まずは、報告の前段階として、中央アジアとインドとの境目を確認するため、インドへ向かった人々の理解を参考にした。5世紀初頭の法顕は、パミールを越え、ダレルへ入った段階でそこを北インドと認識し、6世紀初頭の宋雲・慧生は、ウディヤーナの南がインドであると述べている。一方、隋代に編纂された『西域図記』（逸文）には、中央アジアからバーミヤーン、カーピシーを経てインドへと向かうルートが記されている。7世紀にここを通過した玄奘の認識も基本的に同じであり、カーピシーを通過した後、ランパーカでインドに入ったとする。さらに16世紀初頭、カーブルからインドへと遠征を繰り返すムガル朝を建てたバーブルの認識も、基本的に玄奘と同じである。

この他、中央アジアとインドとの境目を理解する方法として、言語の違いにも注目できる。すなわち、玄奘がカーピシーの王として記す「刹利」が、バクトリア語で在地の支配者を示す $\chi\alpha\rho\omicron$ と同系の言葉を写したものであること、さらに玄奘の通訳としてバルフから同行したと思しき慧性が、カーピシーまで来たところでトハーリスターンへと帰還していることから、カピシ・カーブル地域まではバクトリア語圏、それより南はインド語圏であったと考えることができる。またこの問題に関しては、考古学的分析も参考になり、ナガラハーラとガンダーラとの間で仏教寺院の建築資材の違いが見られることが指摘されている。

次に、クシャーン朝の具体的な動向を確認した。『後漢書』西域伝・大月氏国条に記されている王朝の歴史的展開がおおむねその通りであることは、ガンダーラ語やサンスクリット語の碑文、他の漢語文献から再確認することができる。王朝は、初代クジュラ・カドフィセスの治世にガンダーラ方面へと進出し、その後、ヴィマ・タクトゥ、ヴィマ・カドフィセスの二代の間に大きく中インドのマトゥラーにまで勢力を広げた。そして、4代目カニシュカの治世に至って王朝の領域は最大となり、サーケタ、カウシャーンビー、サールナート、サヘート辺りまで広がった。このことはラバータク碑文（バクトリア語）や他の資料から知ることができる。カニシュカ以降のクシャーン朝の動向は不明な部分が多いが、3世紀前半にサーサーン朝が勃興したことにより、ヒンドゥー・クシュ山脈北側の領域を失ったと考えられている。また、ヴァースデーヴァという名の王が現れるなど、次第にインド化していった可能性もある。

クシャーン朝の衰退後、中オアアジアに展開したのは、キダーラ、アルハン、エフタルなどの集団である。近年、ヨーロッパに侵攻したいわゆるフン族と、中央アジアで展開したこれらの諸勢力は、共に4世紀中頃アルタイ山脈付近に存在した匈奴の残存勢力にルーツを持つという考えが主流になっており、報告者も基本的にこの説を受け入れている。中央アジアへ到来したフン系集団のうち、最も早くに登場するのは、4世紀のローマの歴史家プリスクスが記すキオニタエという集団であるが、資料が少なく詳細は不

明である。プリスクスによれば、サーサーン朝のシャープール2世は、353年以降、王朝の東方領域に侵入してくるキオニタエなどの勢力と争うが、その後同盟を結び、359年、対ローマのアミダ包囲作戦では、グルンバテスに率いられたキオニタエがシャープールの軍に同行している。

次に登場するキダーラは、その勃興年代に関する大きな議論があり、未だ決着を見えない。『魏書』西域伝にキダーラがトハーリスターンからインド方面へと展開したことが記されており、これが457年（あるいは437年）にもたらされた情報であることから、文献を重視する研究者は、この集団が勃興・展開したのは5世紀以降のことであると考える。一方、貨幣を重視する研究者は、カーブル近郊のテペ・マラーンジャンで出土した一括埋納貨幣において、4世紀のサーサーン朝の諸王の貨幣と共伴する金貨の銘文をキダーラと読み、その勃興年代を4世紀後半とする。両説の当否は判明していないが、貨幣の銘文の読みに疑問が呈されていることから、後者の説を今後再検討しなければならない。イスラーム時代の年代記やアルメニア語資料に、5世紀のサーサーン朝の王（バフラーム5世、ヤズデギルド2世）が、テュルクのハーカーン、あるいはクシャーンと呼ばれるフン族と争っていたことが記されており、キダーラの展開と関係する可能性がある。

近年の貨幣学的研究の進展により、4世紀後半以降、アルハンと呼ばれる、これまで文献からは知られていなかった集団が、西北インドに展開し、パンジャーブ、インドへと進出していったと考えられるようになってきている。4世紀後半というアルハンの勃興年代は、先述したキダーラの勃興年代の学説の1つと重なることから、問題は非常に複雑であり、今後関連する資料を改めて検討しなければならない。またアルハンに関しては、貨幣の銘文に見られるアルハンの諸王（キングラ、トラマナ、メハマ、ジャヴカ）の名前に同時に言及するスコイエン・コレクションの銅板銘文が注目を集めている。碑文の年代が5世紀末（492/3年あるいは495/6年）であることから、アルハンが展開した年代の指標を得ることができるが、寄進者の称号に見える *tālagāna*- という地名の所在地が議論の対象となっており、地理的な理解を得るためにはさらなる考察が必要である。インド史上有名なトーラマーナとミヒラクラはこのアルハンの王であった。

中国の正史などに見られる情報に基づけば、エフタルはヒンドゥー・クシュの南北を支配した強大な勢力であった。また、これまでエフタルの研究ではほとんど注目されてこなかった、イスラーム時代のアラビア語年代期（ディーナワリー『長き物語の歴史』；無名著者『ペルシアとアラブの歴史における究極の目的』）には、「エフタルの国」として、アム・ダリアの北側を挙げる記述と、トハーリスターンやカープリスターンを挙げる記述とが並存している。前述したアルハンの存在を考えると、エフタルの内部構造は複雑であったようで、文献では1つの巨大な勢力のように記されている集団の中に、複数の集団（貨幣学者が呼ぶ「真エフタル」と「アルハン」）が存在した可能性を想定しなければならない。文献と貨幣を総合的に分析する研究が必要となってくる。なお近年、

バクトリア語文書にエフタルの存在が言及されていることが明らかになっているが、これを用いた新しい研究は登場していないため、これについても新たな考察が必要である。

(文責：宮本亮一)